

第一回物質合成国際会議を開催して

本大学間連携が平成 17 年 4 月にスタートして、日本が強みを持つ物質合成を機軸とした化学分野の融合により、革新的な研究展開と研究分野の創成を進める上においてどの様な方策を採ればよいか、その考え方の基軸を何処に置くか、また革新性の高い研究の高リスクを如何に管理して行くかなど、様々の課題があります。

本連携研究事業が始まった後、出来るだけ早い時期に革新的研究創出に向けての考え方、進め方や世界的な動向をメンバー全員で共有するために本国際会議開催を構想しました。そのために世界の主要研究振興機関(日 JSPS、米 NSF、欧 EC、仏 CNRS、独 DFG/DAAD など)と連絡を取り、各国における異分野間の研究と革新的な研究展開についての研究振興策とその具体的な実施状況について調査しました。外国の主要研究振興機関の東京事務所もしくは代表部を通して分野融合やイノベーターな化学領域の基礎～技術開発に至る考え方や具体的な施策およびプロジェクトに関する事業について、同年 5 月より面談やメールにより調査を行った結果、我々の考えに近いプログラムが NSF と EC で進行中であることから、各プロジェクトの責任者であるプログラムディレクター/オフィサーにご講演願うことになりました。個別の講演概要に纏めましたように、日本学術振興会を含め、いずれの組織からも化学分野に基盤を持たれ、精通された3名の講演者の方にお越し頂けたことは、我々にとってはそれぞれの提案やプロジェクトについてのその構想が良く理解でき、また招待講演者の方々にとりましても我々の連携研究の内容と意義をご理解していただい、相互に化学分野のイノベーションについて円滑な意見交換が出来たことは本会議の大きな成功要因の一つであったと考えます。

本国際会議開催のもう一つ目的は、この様な海外の主要研究振興機関との関係を築くことにあります。今後、本連携研究が国内の物質合成にかかわる主要研究組織間のネットワーク構築だけでなく、並行して国際的な研究ネットワークを作る上からも重要であると考えています。また、日本学術振興会において、新たな革新的研究領域における国際的協力研究の枠組みを作っていた上からも、今回の国際会議が良き契機となればと願っています。

国際会議開催にしては短い準備期間しか無かったにもかかわらず国内外よりそれぞれ多忙なご予定を調整して講演いただいた、深井宏氏[(独)日本学術振興会]、Philip P. Shevlin 博士[NSF, USA]、および Søren S. Bøwadt 博士[EC]に深く感謝します。アドバイザーの先生方にもご多忙な中ご出席の上、熱心にご討論頂き、本連携研究に対して貴重なアドバイスを頂きました。また、12月中旬の PCIFICHEM の後、年末・年始を挟み、大変時間的な制約の多い中で、準備に奔走していただいた九州大学・先導物質化学研究所の連携メンバー並びに事務職員の方々の真摯で献身的なご努力に対しまして併せて厚くお礼申し上げます。

九州大学先導物質化学研究所
集積分子化学ユニット 代表 成田吉徳